

# 2021-2022年シーズン 高病原性鳥インフルエンザ

## 高病原性 鳥インフルエンザは、 日本では、2004年に79

年ぶりに発生が確認されて以来、晩秋から春先にかけて、数年おきに流行を繰り返してきました。

2021年～2022年シーズン（以下「今シーズン」という。）は、2021年11月から2022年5月までに、計12県で計25事例の発生が確認され、計52例の発生が確認された2020年～2021年シーズンに引き続き2年連続の発生となりました。

## 今シーズンの発生概況

今シーズンは、2021年11月10日の秋田県の採卵鶏農場におけるH5N8亜型ウイルスによる発生を初発として、九州地方から北海道まで全国の12道府県において、計25事例の発生（H5N8亜型及びH5N1亜型）が確認されました。

過去のシーズンでの、最も遅い発生は4月でしたが、今シーズンは、4月以降の発生が8例（全体の32%）あり、最終発生が5月14日と発生シーズンの長期化が見られました（特2-1表、特2-1図）。

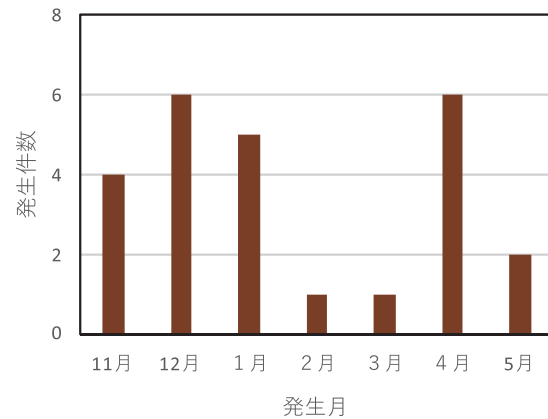
特2-1表 2021-2022シーズンの家きんにおける高病原性鳥インフルエンザ発生事例

|      | 地域         | 疑似患畜判定日 | 用途             | 羽数(万羽)      | 亜型   |
|------|------------|---------|----------------|-------------|------|
| 1    | 秋田県横手市     | 11/10   | 採卵鶏            | 約14.3       | H5N8 |
| 2    | 鹿児島県出水市    | 11/13   | 採卵鶏            | 約3.9        | H5N1 |
| 3    | 鹿児島県出水市    | 11/15   | 採卵鶏            | 約1.1        | H5N8 |
| 4    | 兵庫県姫路市     | 11/17   | 採卵鶏            | 約15.5       | H5N1 |
| 5    | 熊本県南関町     | 12/3    | 肉用鶏            | 約6.7        | H5N1 |
| 6    | 千葉県市川市     | 12/5    | あひる(アイガモ)      | 約0.03       | H5N1 |
| 7    | 埼玉県美里町     | 12/7    | 採卵鶏            | 約1.7        | H5N1 |
| 8    | 広島県福山市     | 12/7    | 採卵鶏            | 約3.0        | H5N1 |
| 9    | 青森県三戸町     | 12/12   | 肉用種鶏           | 約0.7        | H5N1 |
| 10   | 愛媛県西条市     | 12/31   | 採卵鶏            | 約13         | H5N1 |
| 11   | 愛媛県西条市     | 1/4     | 採卵鶏            | 約8.3        | H5N1 |
| 12   | 愛媛県西条市     | 1/4     | 採卵鶏            | 約14.2       | H5N1 |
| 12関連 | 愛媛県今治市     | 1/4     | 採卵鶏            | 約0.6        | -    |
| 13   | 鹿児島県長島町    | 1/13    | 肉用鶏            | 約5.4        | H5N1 |
| 13関連 | 鹿児島県長島町    | 1/13    | 肉用鶏            | 約5.7        | -    |
| 14   | 千葉県八街市     | 1/19    | 肉用鶏            | 約6.6        | H5N1 |
| 15   | 千葉県匝瑳市     | 1/26    | あひる            | 約0.17       | H5N1 |
| 15関連 | 千葉県匝瑳市     | 1/26    | あひる            | 約0.12       | -    |
| 15関連 | 茨城県かすみがうら市 | 1/26    | あひる            | 約0.11       | -    |
| 15関連 | 埼玉県春日部市    | 1/26    | あひる            | 約0.14       | -    |
| 15関連 | 埼玉県熊谷市     | 1/26    | あひる            | 約0.04       | -    |
| 16   | 岩手県久慈市     | 2/12    | 肉用鶏            | 約4.5        | H5N1 |
| 17   | 宮城県石巻市     | 3/25    | 肉用種鶏           | 約3.2        | H5N1 |
| 18   | 青森県横浜町     | 4/8     | 肉用鶏            | 約17         | H5N1 |
| 19   | 青森県横浜町     | 4/15    | 肉用鶏            | 約11         | H5N1 |
| 20   | 北海道白老町     | 4/16    | 採卵鶏            | 約52         | H5N1 |
| 21   | 北海道網走市     | 4/16    | だちょう(エミュー)/採卵鶏 | 約0.05/約0.01 | H5N1 |
| 22   | 秋田県大仙市     | 4/19    | 採卵鶏            | 約0.04       | H5N1 |
| 23   | 北海道釧路市     | 4/26    | だちょう(エミュー)     | 約0.01       | H5N1 |
| 24   | 岩手県一関市     | 5/12    | だちょう(エミュー)     | 約0.001      | H5N1 |
| 25   | 北海道網走市     | 5/14    | 採卵鶏            | 約0.08       | H5N1 |

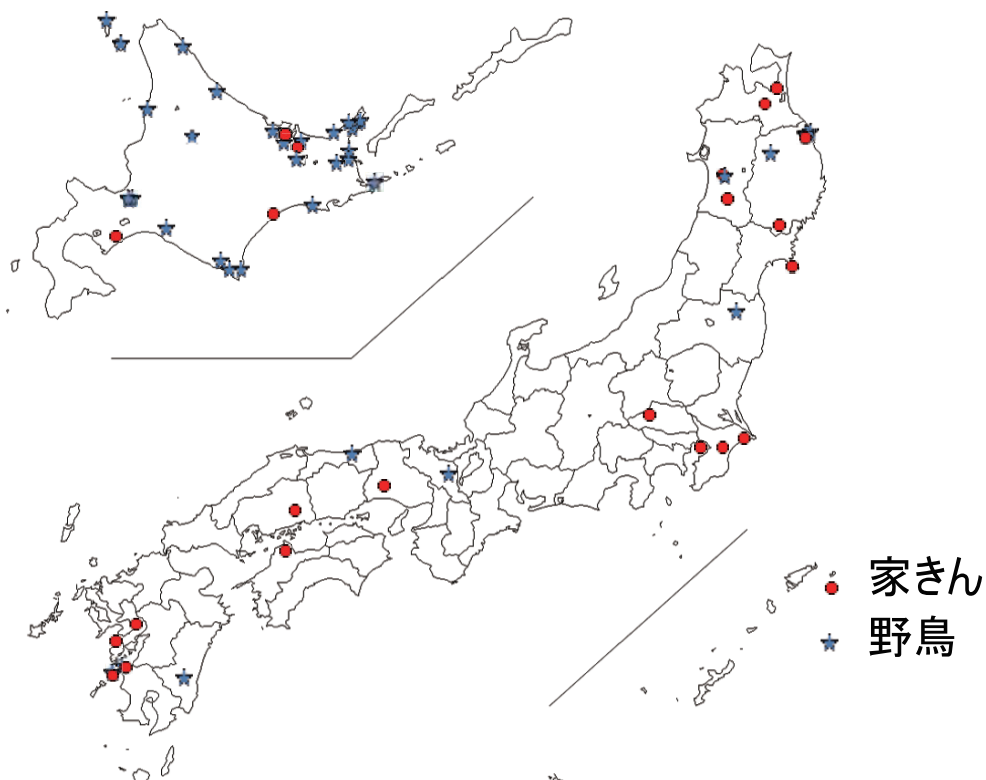
25例のうち、12例（48％）が北海道及び東北地方における発生でした。発生のあった道県については、県内で複数の発生が認められた県もあれば、1例の発生にとどまる県もありました。なお、北陸地方、東海地方での発生はありませんでした。

また、今シーズンは採卵鶏、肉用鶏に加え、あひる農場と、だちょう・エミュー農場における発生も確認されました。

特2-1図 2021-2022年シーズンの月毎の発生件数



特2-2図 2021-2022年シーズン高病原性鳥インフルエンザ確認地点



## 野鳥における発生状況

今シーズンは、多くの野鳥で本病の感染が確認されました。2021年11月から5月までの間に、全国8道府県の野鳥（13種/98例）、糞便（1例）、ねぐら水などの環境試料（8例）の計107事例の高病原性鳥インフルエンザウイルス（H5N1亜型84例、H5N8亜型7例、H5のみ確認16例）検出報告がありました。

ウイルス感染は、渡りによりウイルスを運搬すると考えられているカモ類のほか、猛禽類、カラス類で確認されました。カラス類については、1月から4月にかけて東北北部と北海道でハシブトカラスの感染確認が続き、同一市町内で多数の感染個体が回収されるなど、広範囲の地域で大規模な感染が確認されました。

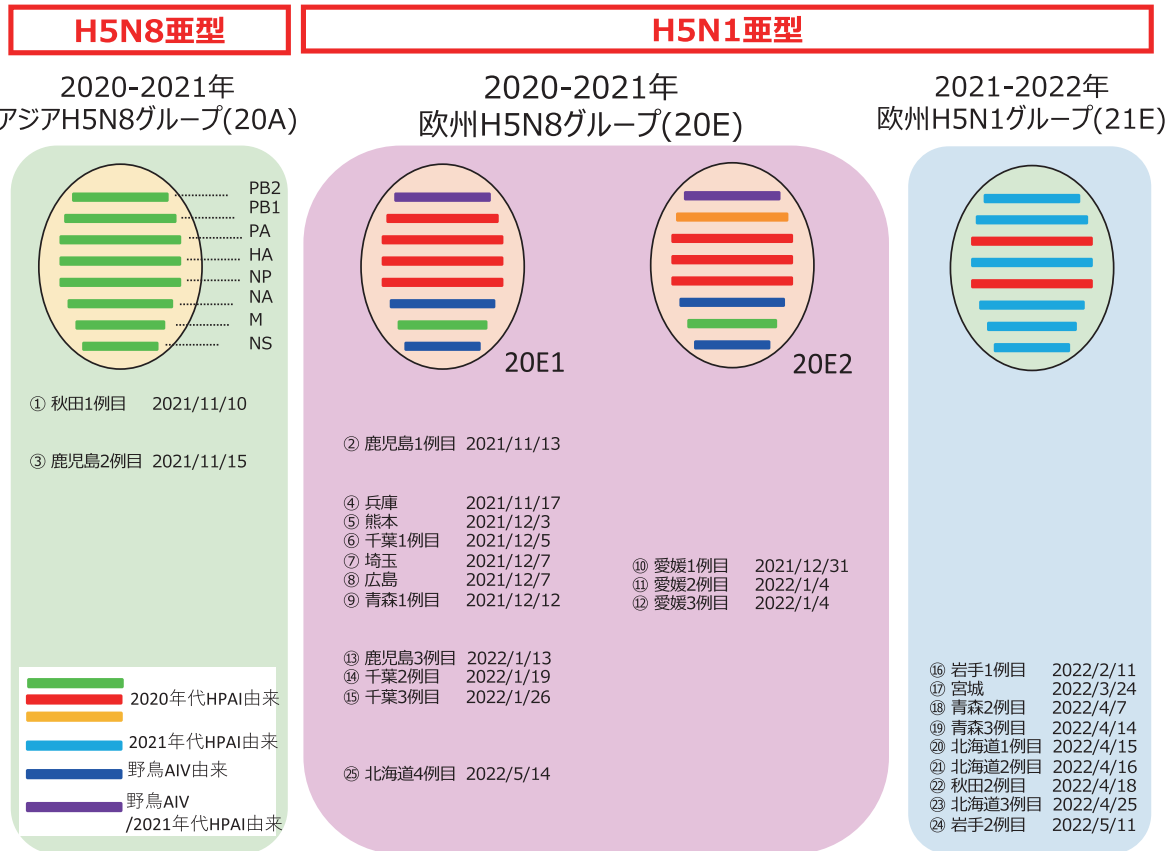
## 分離されたウイルスの特徴

今シーズンの家さんの発生事例（25事例）から分離された鳥インフルエンザウイルスについて、遺伝子的な特徴を見るために全ゲノム解析を行なったところ、H5N8亜型のウイルスは、2020年から2021年に日本を含むアジア地域で分離されたH5N8亜型のウイルス（2020-2021年アジアH5N8グループ：遺伝子型20A）、H5N1亜型のウイルスは2020年から2021年に欧州地域で分離されたH5N8亜型のウイルス（2020-2021年欧州H5N8グループ：遺伝子型20E）及び2021年から2022年に欧州地域で分離された主にH5N1亜型のウイルス（2021-2022欧州H5N1グループ：遺伝子型21E）の3つのグループに分類されることがわかりました（特2-3図、特2-4図）。さらに、2020-2021欧州H5N8グループの中には2種類の遺伝子再集合ウイルス遺伝子型20E1及び20E2）が含まれることが明らかとなり、遺伝子型としては4種類のウイルスが、国内に飛来する渡り鳥によって国内に侵入したと考えられています。



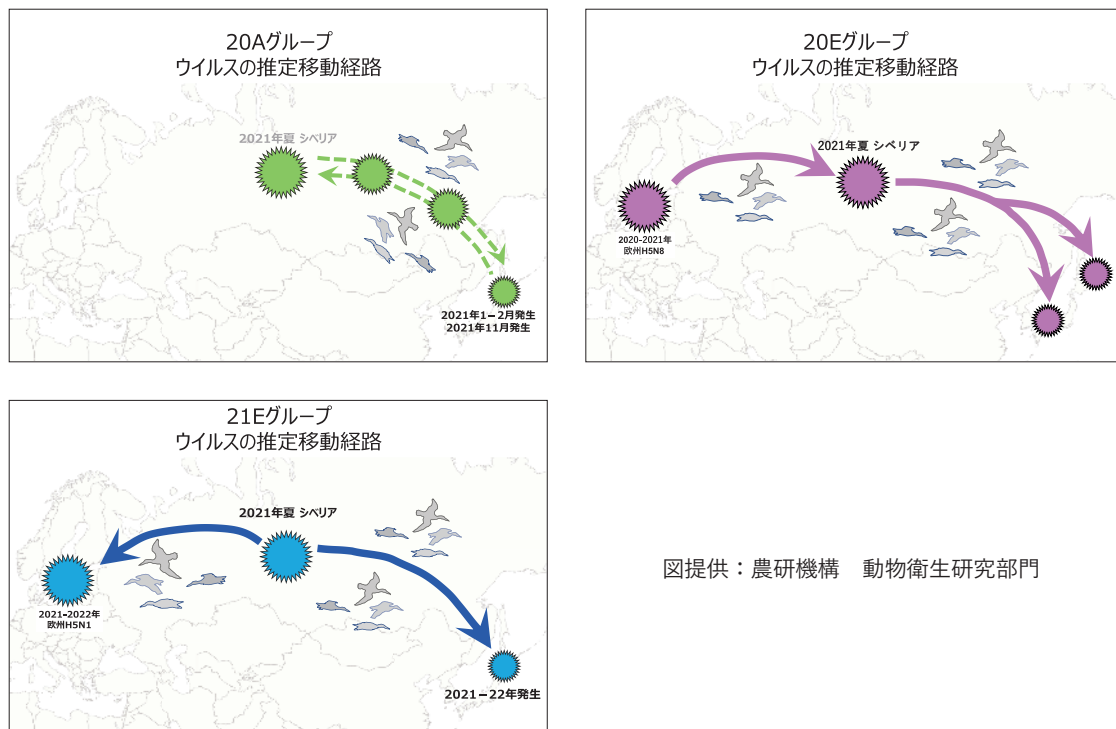
特2-3図

2021年シーズン 8 分節の遺伝子系統樹解析に基づく国内H5N8亜型高病原性鳥インフルエンザウイルスの遺伝的多様性



図提供：農研機構 動物衛生研究部門

特2-4図



図提供：農研機構 動物衛生研究部門

## 国内における防疫対応

高病原性鳥インフルエンザ発生への備えとして、農林水産省は、渡り鳥の飛来が本格化する前に、全国会議、通知等で都道府県、関係団体等に対して発生予防対策と早期発見・早期通報等のまん延防止対策の徹底について呼びかけを行い、それを受けて、都道府県では家きんの所有者に対する注意喚起や、発生に備えた動員・調達計画の策定や防疫資材の確保等を行なうなど、国をあげてシーズン前から防疫体制の構築を進めました。

家きん農場における発生に対しては、関係機関・団体、市町村、自衛隊等が協力して、まん延防止のための迅速な殺処分や汚染物品の処分等の防疫措置を行いました。加えて、迅速な防疫対応を開始できるよう、国立研究開発法人農業・食品産業機構動物

衛生研究部門が、24時間体制で発生県が実施した検査の結果の確認や病原性の評価などのための検査を行いました。また、発生農場には行政及び専門家からなる疫学調査チームが立入り、疫学調査を実施しました。

今シーズンの最終発生は2022年5月14日の北海道の採卵鶏農場でしたが、防疫措置は同15日に完了し、6月6日には本事例を含む全ての移動制限が解除され、6月13日付で国際獣疫事務局（OIE）の陸生動物衛生規約に基づき、日本は高病原性鳥インフルエンザの清浄国への復帰を宣言しました。

高病原性鳥インフルエンザに関する詳細情報は以下もご確認ください。

<https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/tori/index.html>



写真提供：（上）北海道  
（右）農研機構 動物衛生研究部門

